

谷口俊子伝

谷口俊子は大正十一年三月十八日、八人兄弟の次女として生まれる。尋常高等小学校を卒業後、十五歳で子守りとして奉公にあがった。

八年間の奉公を終えると、母親ちよと同じ町に住む谷口みなどの話し合いで、谷口家へ嫁ぐことになる。今となっては笑い話だか、結婚については俊子の意思など全く考慮されなかったらしい。

いよいよ婚礼の日、なんということか夫又一に召集令状が届き、翌日慌ただしく金沢の陸軍第七連隊へと入隊してしまったのである。

この展開は、今はやりの韓流ドラマのようだ。いわば谷口俊子は悲劇のヒロインなのである。

秋のその日より二人は一度の面会も許されず、太平洋戦争がどんどん厳しい戦況に入っていくさなか、とうとう又一にも南方戦線（現在のニューギニア、ボルネオあたり）への出征命令が下る。

出発当日になってやっと面会の許可がおり、俊子は慌てて金沢の連隊へ向かったのだが「バンザイバンザイ」の声に送られる出征兵士の大行進が目の前を通り過ぎるばかり。とうとう又一の姿は見つけることができなかった。頼まれて持っていったタバコも渡せず、俊子は泣く泣く家へ帰ったという。



このたった1日の新婚の思い出を胸に、俊子は姑と共に沢山の小姑たちを抱えながらも、気丈に谷口家を守ったのだった。

それから三年の月日が経ち、昭和二十年八月十五日に終戦となった。ところが、なかなか又一は帰らない。一向に消息もわからず、もしやとの不安な考えも浮かんで来てしまう。日々だけが過ぎ、稲刈りも終わって秋が深まったころ、ひょっこり又一は帰ってきた。

ぼろぼろの軍服姿で、痩せこけたその格好はひどくみすぼらしく、俊子はその汚い衣服をすぐに畑で燃やした。戦時中であれば軍服を燃やすなどとんでもない行為だろうが、それには俊子の戦争という愚かな行いに対する激しい怒りが込められていたのかもしれない。

その後又一は建具店に職を得て懸命に技術を身につけ数年後に独立、実家で建具店を始めたのである。

谷口家の長男である又一は、父親を早くに亡くし八人兄弟の大黒柱として身を粉にして働き、幼い兄弟たちの面倒も見る生活であった。

商売の才能があった又一は、幸いなことに建具店をなんとか軌道に乗せることができた。商才というとなんとなく小狡く立ち回ってうまく儲けるイメージだが、又一の場合とはにかく誠実に真面目一筋を貫き通すことによって人々の信頼を得、それが注文に結びつくというやり方であった。すぐには成果のでない愚直な方法かもしれないが、それは生まれ持った又一の性格に起因するものだろう。

ある時、そんな又一を見込んで知人より自分の持つ石山を買ってもらえないかとの申し出があった。なんでも、新しく別の商売を始めたいらしく、ついにはその資金繰りのためだという。

当時からその辺りでは山から建築用の石材を切り出して売ること何軒かの家でやっていたことであったが、良い利益の上がる商売とは言い難い状況だった。

周囲の心配の声が多いなか又一は熟考の末、建具店は弟子に譲り、その石山を買うことにした。知人はたいへんに感謝したという。

もちろんいろいろな計算もあつてのことだろうが、その辺りに困った知人を助けよう

という又一の心優しい一面が垣間見える。

それからまた俊子と又一夫婦の新しい苦勞が始まった。先に石山をやっていた辻本家、橋本家は谷口の家など比べ様もない大きな身代なのである。石工（石職人のこと）を何人も雇い、しかも当主は又一より年上である。新参者の又一の意見など端から聞く耳を持たない。又一は齒を食いしばって考えた。今のままでは石山はだめだ。なにか別のやり方をしない限り、いずれ衰退してしまう。

そこで、意を決した又一は石材業の本場、大谷石で名高い栃木県へ視察研究の旅に出ることにした。そこでは見たこともない機械を使って安全に大量の石を切り出し、全国に出荷していた。「これだ！」と直感した又一は石山の機械化にむけて準備を始めるも、一緒にやろうと声をかけた辻本家橋本家の返事ははかばかしくなく、町の人からは変わり者とばかりの冷ややかな視線を浴びてしまうほどだったらしい。



この苦境を夫婦は黙って耐えた。今に見ているという負けん気だけが二人の生きるよすがだった。ところがその頑張りもなかなか成果をあげない。しかし、決してくじけない二人に少しずつ光明が差してきた。機械によるやり方が、いかに便利で効率が良いかということを経々々に皆が理解し始めたのである。とうとう又一の工夫を凝らした方法が取り入れられ、観音下石材株式会社として三つの家の共同出資により大きく事業を展開することとなった。

これで万事うまくいくと安心したのも束の間、出資額の多い辻本家と橋本家の当主の仲が非常に悪いのである。ことあるごとに反目し互いに相手の批判ばかりという有様。間に立った年若い又一は、そんな意地の張り合いに耐えかね、二人と間をおき別の場所で石切りをすることにした。こうすれば二人の争いに巻き込まれることもないからである。ところが、そこは大変石の質の悪い丁場（石山のある一角のこと）であった。切っても切っても出てくるのは売り物にならない屑石ばかり。その間、辻本家橋本家の丁場では又一の考えた方法で大きな成果をあげ儲けている。又一と俊子はことの成り行きの不公平さに歯噛みし、涙をこらえながら黙々と仕事を続けるしかなかった。

その頃の一つの逸話がある。観音下石材全体としては業績も上がり余力も出てきたことから、石工の家族も含め年に一度、日光や伊勢など方々にバス旅行へ出かけるようになったのだが、谷口家の山だけは赤字続き、夫婦だけ残り、旅行の間も仕事を続けなければならなかった。さすがに情けなくなって俊子は又一にくっついてかかったこともあったとか。



どうにかしようと暗中模索の又一にある話をもたらされた。良質な石の出る山があるのでやってみないかとのことである。さんざ苦勞した末その話に乗ってしくじったら、もう取り返しがつかないと普通の人間なら二の足を踏むところだが、良しと思ったら躊躇なく決断できるいわば胆力というべきものが又一には備わっていた。その山で採石をやるうと決心したのだ。

もっとも腕のいい石工にも来てもらい、石を切ってみると思った以上に良いものが採れた。俊子の心配をよそにその後も順調で飛ぶように石が売れる。トラックで会社まで運ぶ経費を差し引いても、十分な利益が上がったのである。ようやく今までの長く辛い苦勞が報われたと、二人して喜び合い、しみじみと勞い合った。

その後二人は長男を不慮の事故で亡くすという不幸はあったが、残る三人の子も社会人となり一息ついた安堵感のなか六十代七十代を過ごす。平成八年十一月十六日又一が他界し、数年を経たのち、生まれ育ったふる里を離れ転居することとなる。

八十を過ぎた高齢での環境の変化はともすれば本人の元気を奪ったりするものだが、俊子はそんな心配をよそに新居ですぐに畑仕事を始め、近所に親しい友達も作って仲良くやっている。また、週に一度のデイケアサービスでは、手芸などをして大いに楽しみ、施設の元気者として職員たちに一目置かれるほどなのである。 了



谷口俊子伝

<http://p.booklog.jp/book/101315>

著者：谷口広明
イラスト：盛岡幸三

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101315>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101315>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ